山田安彦先輩を偲ぶ

前歴史地理学会長，同会名誉会員，山田安彦先輩が平成14年１月７日永眠されました。享年74才，心より哀悼の意を表したい。

氏は昭和２年(1927)５月27日，兵庫県加古郡神野村西条（現加古川市神野町西条）に生まれ，戦時下の昭和20年３月に兵庫県立姫路中学校を卒業，その後，立命館大学に進まれ昭和26年に同学文学部地理学科を卒業と同時に，同学大学院文学研究科東洋思想学科歴史地理思想専攻を修了された。修了の昭和29年より同34年まで同学文学部地理学科の研究助手として勤務された。

昭和34年(1959)に岩手大学学芸部に転ぜられ，17年間の盛岡時代をへて昭和51年に千葉大学教養部教授。定年後の平成５年に神戸学院大学教授，同学特任教授をへて平成12年に退職された。

氏は筆者とは立命館大学で１年先輩にあたるが，その親交は当時の広小路学舎時代にさかのぼる。それは藤岡謙二郎先生の主宰された史前学会であった。機関紙「馴鹿」を創刊したのもその頃であり，その編集についてよく指導もうけ激論したこともあった。また青木良信先輩が東山三条の自宅を史前学研究所として開放しており，大学の帰路に２人でよく訪れて議論をした。あとは山田先輩の下宿，南禅寺まで歩いて行った，その下宿は南禅寺の金地院の筋向いの塔頭，南陽院であった。部屋の前の泉水に緋鯉が泳ぐ優雅な下宿であった。

優雅なのは下宿だけではなく山田先輩そのものもそうだった。袴姿が多くどことなくヌッチェンリッヒな面があり，谷岡武雄先生はマドモアゼル・ヤマダと呼んでおられたが，我々後輩たちは陰でやま子，やま子と呼んでいた。山田先輩お許し下さい。

山田さんの業績は枚挙にいとまがないが，

特筆すべきものは『古代東北のフロンティア』(古今書院，昭和51年)であろう。サブタイトルは「東北日本における律令国家と蝦夷の漸移地帯に関する歴史地理学的研究」である。これは東京教育大学に提出された学位論文である。畿内育ちの山田さんが風土の異なる盛岡時代に東北をフィールドに大成したこの労作は今も名著として高く評価されている。

また編著では大明堂刊の『歴史のふるい都市群』全12巻をあげなければならない。この著作は藤岡謙二郎先生の遺志をうけつぎ山嵜謹哉氏とともに編著したもので，山田さんの恩師に対する厚き想いをみることができる。

先年に学生時代のガールフレンドであった増枝夫人を亡くされた。山田先輩は比類なき愛妻家でもあった。平成11年刊の『ケントゥリア地割と条里』(大明堂刊）の献呈本に“妻に捧げるために筆を執りました　乞御斧止”

と自著されていた。また学友の『桑原公徳先生追悼録』に「わが友，桑原君を想う」で“……後に私の妻となったその彼女も西方の十万億土に旅立ってしまった……わかっていても淋しくて悲しくてやるせなくて，せつなくて寂寞として空虚で身の処すべきすべもない……残ったわれわれは友や妻の分まで生き伸び，仕事を遂行させなければならない……”と追悼しつつ，山田先輩も黄泉国に旅立ってしまった。残された筆者はただただ胸が痛むのである。どうか安らかにお休みください。

（伊藤安男）